

十二神将像の図像的系譜に関する一試論

一本 崇之（神戸大学大学院）

十二神将像は、図像の異同が多く、所依経軌を明らかにすることができないことから、その図像は自由な創意にまかせて制作されていると説明されてきた。しかし一方で、十二神将の作例の中には、図像的に近似する作例がみられることも見逃すことはできない。本発表では、12体が完存する十二神将の古例で、康平七年（1064）に仏師長勢によって制作された広隆寺像を中心に、特に図像に注目して考察し、同時代作例である東大寺像や承徳2年（1098）の造立となる東山寺像との比較からその図像的特徴を考察する。

広隆寺の像容は、早くより先学の指摘のある通り、新薬師寺像との共通性が見受けられ、現存する新薬師寺像11軀の内（波夷羅像は後補）、8軀が対応する（因達羅像は反転）。これにより、広隆寺像は新薬師寺像を手本として造られたという指摘もされてきた。しかし、広隆寺像と東大寺像の像容を観察すると、意外にも広隆寺像との共通性が見出せる。広隆寺像の尊名による順番はひとまず無視をして、東大寺像との対応で並べると、12軀の内、寅・辰・午・申神像が完全に一致し、子・卯神像も反転すれば広隆寺像と一致する。未神の左手に弓を持ち右手で矢を引く形は招杜羅像と弓を持つ位置の違いがあるものの同一で、これは反転しているが酉神と迷企羅像にも言えよう。ただし、残りの丑・巳・戌・亥神像についてはやや相違が見受けられる。丑神は未神同様弓を引く姿であるが、未神に比べやや左腕を曲げ、右手も腹前あたりに置く様子は、安底羅像の矢をつまよる姿に通じ、右手に持物を持ち、左手を頭上にかざす亥神の姿は真達羅像の頭上で戟を持つ姿に通じる。巳・戌神は近似のものが見出せないが、左手の掌を広げ、右手は腰辺りで持物を持つ姿が比較的摩虎羅像に近いと思われる。このようにみると、これまで指摘のあった新薬師寺像よりも、東大寺像との図像的な近似が確認できる。さらに申・巳神を除けば、兜・焰髪・髻の頭部の関係もそれぞれ対応していることも注目される。上記の指摘は、東山寺像でもおおよそ当てはめることができ、経典においても図像が様々に説かれて統一をみない十二神将において、ここまで共通性を見出せることは、なんらかの影響関係が推察される。

本発表では、特に図像面において、主に広隆寺像・東大寺像・東山像を比較検討することにより、共通する統一された図像の見出しにくい十二神将像において、同一の系譜ととらえられる図像的共通性が見いだせることに注目し、これらの一連の諸像が、図像的に同じ系譜上に位置づけられること示す。新薬師寺像より広隆寺像に受け継がれる図像が、平安後期頃にまで継承される十二神将像の一つの規範となっていた可能性を指摘したい。